モニタリングサイト1000
Since 2003

モニタリングサイト1000調査速報

2025年度 干潟 Tidal Flats

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平らな地形を示します。 干潟は多くの底生生物が暮らす場であるだけでなく、潮の満ち引きがあるため、干潮時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場、冠水時には稚仔魚（ちしぎょ）のえさ場や生育場として、様々な生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。

干潟調査

2008年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の２つの調査により、各サイトの複数エリアで底生動物（貝・カニ・ゴカイの仲間など）の群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、自然環境保全のための基礎情報を得ています。

2025年度の調査では、日本沿岸の8箇所のコアサイトと2箇所の協力サイトで、18度目（協力サイトは10度目）となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する動物の種類や数を調べます。

速報掲載更新履歴

2025. 12. 5	松川浦サイト	▶ Link
2025. 11. 5	永浦干潟サイト	▶ Link
Coming Soon	厚岸サイト	▶ Link
Coming Soon	盤洲干潟サイト	▶ Link
Coming Soon	汐川干潟サイト	▶ Link
Coming Soon	南紀田辺サイト	▶ Link
Coming Soon	中津干潟サイト	▶ Link
Coming Soon	石垣川平湾サイト	▶ Link
Coming Soon	松名瀬干潟サイト	▶ Link
Coming Soon	英虞湾サイト	▶ Link

永浦干潟サイト（熊本県）

ハクセンシオマネキ

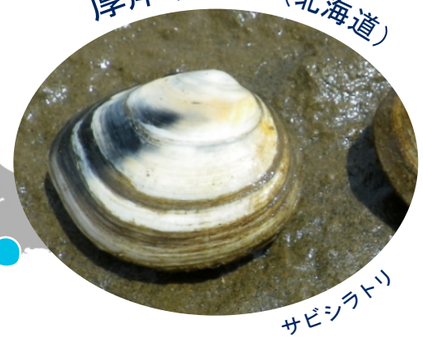
中津干潟サイト（大分県）

カワアイ（左）とヘナタリ（右）

松川浦サイト（福島県）

マツカワウラカワザンショウ

厚岸サイト（北海道）



サビシラトリ

松名瀬干潟サイト（三重県）

オカミミガイ

盤洲干潟サイト（千葉県）

クシテガニ

汐川干潟サイト（愛知県）

ウミニナ

英虞湾サイト（三重県）

イボウミニナ

南紀田辺サイト（和歌山県）

コゲツノブエ

石垣川平湾サイト（沖縄県）

ルリマダラシオマネキ

● コアサイト
● 協力サイト

参考情報

- モニタリングサイト1000干潟調査の調査項目と内容 ▶ Link
- 2024年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 ▶ Link
- 2024年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 ▶ Link
- モニタリングサイト1000沿岸域調査 磯・干潟・アマモ場・藻場 2008-2022年度とりまとめ報告書 ▶ Link

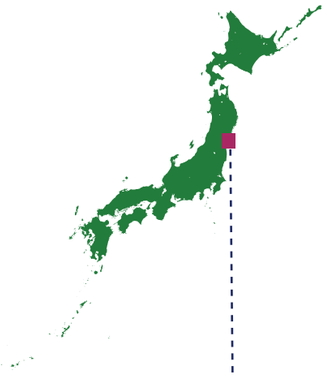
環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan

Wetlands INTERNATIONAL

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

松川浦（まつかわうら）サイト

- 福島県相馬市 -



- 仙台湾の南端に位置し、砂洲（さす）によって太平洋と隔てられた南北に長い潟湖であり、東北地方最大級の干潟です。松川浦県立自然公園に指定されている場所です。
- 多くの場所で岸辺は護岸されており、ヨシ原のようなエコトーン（移行帯）が見られる場所は限定されています。
- 2エリア（A･B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。
- 東北地方太平洋沖地震に伴い発生した津波の影響を受けました。

この地図は国土地理院地図を基に作成

▲ **ウスキセワタ**：干潟表面を這い回る白い巻貝。退化した薄い殻を体の中に隠し持っています。実体顕微鏡下で殻を観察したところ、表面の螺溝が線状であることからウスキセワタと同定されました。

▲ **オヤイヅオキナガイ**：東北地方では松川浦からのみ生息が確認されている希少な二枚貝です。ソトオリガイの幼貝に良く似ていますが、殻の形がわずかに異なります。本サイトでは2023年度の調査で初めて確認されました。

調査結果概要

太平洋との通水路付近に位置するAエリアでは、例年と同様に、巻貝のマツカワウラカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類）とホソウミニナが干潟表面に極めて高密度で生息していました。潮間帯上部では二枚貝のオヤイヅオキナガイ（*絶滅危惧Ⅱ類; 写真d）が確認され、下部ではユウシオガイが多く見られました。また、松川浦サイトでは初記録となるカクベンケイガニが、潮間帯上部の転石帯で確認されました。希少種であるツバサゴカイ（**絶滅危惧IB類）の棲管も、例年と同様に干潟上で複数確認されました。外来種の貝食性巻貝であるサキグロタマツメタは、両エリアで減少傾向にありました。潮間帯下部の後背湿地では、ヨシ原が拡大して水路の地盤高も高くなったため、閉鎖的な環境になりつつあります。

松川浦の南側最奥部に位置するBエリアでは、ヨコエビ類のニホンドロソコエビ（写真e）や二枚貝のオキシジミが多く見られました。過去に多産したイソシジミはほとんど見られなくなり、マツカワウラカワザンショウも減少していました。潮間帯下部では、東京湾以南の砂泥干潟に生息するオサガニ（写真f）が、前年度に引き続き確認されました。本種は、東北地方では非常に珍しいカニですが、仙台湾の他の干潟でも確認されていることから、ここ数年のうちに仙台湾に定着したと考えられます。なお、Bエリアでは外来種である多毛類のカニヤドリカンザシゴカイが今年度も確認されました。

▲ **ニホンドロソコエビ**：体長1cmほどのヨコエビの仲間で、Bエリアの干潟表面で非常に多く見られました。活発に動き回るので、現場で本種の個体数を数えるのがとても大変です。

▲ **Aエリア全景**：写真手前がAエリアの潮間帯上部、干潟の上部に見える歩道橋の右側奥が潮間帯下部の調査ポイントです。

▲ **スジホシムシモドキとその体表面に付着して生活する二枚貝スジホシムシモドキヤドリガイ**：松川浦サイトでは初記録と思われます。本種の生息のためには、宿主であるスジホシムシモドキが健全な個体群を維持できる、高塩分の砂質干潟環境が保たれることが必要です。

▲ **オサガニ**：東北地方での出現記録はほとんどありませんでしたが、2023年以降、仙台湾の干潟で確認されるようになりました。松川浦でも、別途調査において2023年以降継続して生息が確認されていますが、本調査においても、今年度、複数の個体が出現しました。

調査日 2025. 6. 26 - 27

サイト代表者：金谷　弦
（国立環境研究所）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
金谷　弦（国立環境研究所）【a,b,e】多留聖典（東邦大学）
柚原　剛（国立環境研究所）　阿部博和（石巻専修大学）
鈴木孝男（みちのくベントス研究所）　海上智央（自然教育研究センター）【c,d,f】大見川　遥・小田晴翔・大山雄太郎・高橋陽大・卜部知史・垣内優斗・甲地由樹・花立祐里・松本　拓・渡部渓斗（石巻専修大学）
小川　洋（みちのくベントス研究所）　上野綾子（WIJ）

*　環境省レッドリスト2020、　**　環境省版海洋生物レッドリストを参照

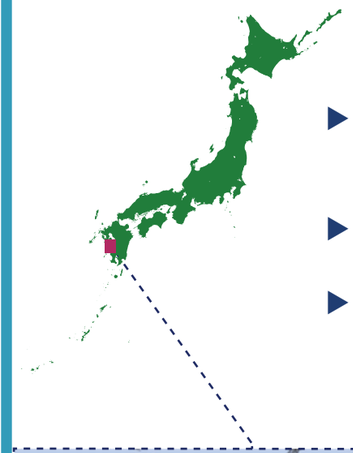
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2025年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2025.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

ながうらひがた 永浦干潟サイト

- 熊本県上天草市 -



- ▶ 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島の南部の前浜干潟です。周囲は雲仙天草国立公園に指定されています。
- ▶ 永浦島周辺には、小規模ながら生物相が豊かな干潟が点在しています。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。

この地図は国土地理院地図を基に作成

▲ **スジホシムシ**：干潟の底土内に潜って生活しています。永浦干潟の位置する天草では、釣り餌としてしばしば釣り人に利用されています。近縁のスジホシムシモドキと異なり、刺激を受けて身体がくびれて数珠状となることはありません。

▲ **アラムシロガイとマキガイイソギンチャク**：アラムシロガイは腐肉食性の巻貝で、死んだ二枚貝等を食べています。殻の上に付着している饅頭形のマキガイイソギンチャクは、アラムシロガイのおこぼれを食べているようです。

調査結果概要

永浦島の南西部に位置する前浜干潟のAエリアでは、二枚貝のホトトギスや巻貝のウミニナ類などが多く確認されました。特に、ホトトギスは潮間帯下部の干潟表面にマットを形成するほど多量に見られました。希少な種としては、ツバサゴカイ（**絶滅危惧IB類）、イボウミニナ（*絶滅危惧 II 類）の他、ウミニナ、スジホシムシ（写真b）、ヒメアシハラガニ（写真c）、オサガニ等が確認されました。

永浦島の南東部に位置する前浜干潟のBエリアでは、二枚貝のホトトギス、コケゴカイ、ホシムシ類の複数種、クモヒトデ類の一種等が多く確認されました。希少な種としては、ツバサゴカイやイボウミニナの他、マキガイイソギンチャク（*絶滅危惧 II 類; 写真d）、タイラギ（写真e）、ハマガニ、オサガニ等が確認されました。また、小規模ですが、今年度も海草のウミヒルモが干潟下部に繁茂していました。

▲**タイラギ**：潮間帯・潮下帯に生息する二枚貝で、写真のように干潟に埋もれて、殻の後縁部を干潟表面に出しています。食用としても利用され、非常に美味ですが、近年では激減し、絶滅が心配されるほどです。

▲ **Aエリアの景観**：Aエリアはハクセンシオマネキの群生地として有名な干潟です。潮下帯にはアマモの群落が見られました。

▲ **ヒメアシハラガニ**：干潟に巣穴（カニの右脚の背後に見える穴）を掘って生活しています。肉食性のカニで、ハクセンシオマネキ等を捕らえて食べます。

▲**オカメブンブク**：ウニ類のなかまです。海底の泥に潜って生活しています。昔話の「分福茶釜」のタヌキに外形が似ており、また表面の棘を取り去った白色の殻が「おかめ」のお面に似ていることが名前の由来です。

調査日　2025. 6. 9-10, および6. 24-25

サイト代表者：山田勝雅
（熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
山田勝雅（熊本大学）　吉川晟弘（熊本大学）　寺田大晟（熊本大学）
逸見泰久（熊本大学）【a-f】　飯盛時生（熊本大学）　逸見高志（熊本県在住）
嶋永元裕（熊本大学）　山平茜莉（熊本大学）

*　環境省レッドリスト2020、　**　環境省版海洋生物レッドリストを参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2025年度干潟調査速報　（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2025.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html